武蔵野東教育センター会報
Newsletter of Musashino Higashi Center for Education and Research

“Heart to Heart”

心から心へ　わかちあう　あたたかさ

第2巻 第3号（No.7）
発行日 平成20年3月3日

目次:

子どもの心理を生かして	1
コラム：自閉症でも「私はあなたの娘」と伝えてくれる我が子	2
特別講演会の報告	2
ギャラリー紹介	3
ご案内	3

子どもの心理を活かして

武蔵野東教育センター所長　長内博雄

今年度も残りあと少しです。保護者の皆様に対する年度のまとめとして行う個人懇談では、後期の目標に対する達成の状態を担当スタッフが所見として記入し、保護者の皆様にお渡しした上で、お子様の成長したところや今後の課題点などをお話しします。一年間を振り返り、少し距離を置いて子どもを見つめることは、本人の発達を多角的に認識するために欠かせないことです。

ある時点の子どもを輪切りにして見るだけならば、「あの子が一番よく出来て、その次は誰々ちゃん、うちの子は後ろから2番目」などという、この子どもたちの成長には無縁な大人社会の比較の目をついつい持ってしまいがちです。しかし、もともと異なった成長の歴史をもっている子どもたちが同じグループとして集まっているだけで、決して比較できるものでないことはお分かりのことと思います。そういう保護者の皆様の心情を理解しながらも、折々に我が子を半年1年というスパンで見つめる習慣をつけることをお勧めしたいと思います。歌の時間に歌詞を覚えて歌えた子もすばらしいが、マイクを通して「アアー」と初めて声を出せた子に感激させられるのは、時間をかけたその子の成長の貴さを我々が感じとっているからに他なりません。

ところで、障害のない幼児の生育過程において、争い競うということとは少し違いますが、他の子から刺激を受けて同じことを真似てみたり、同じようにほめられたいと励んで競ったりというような本能的欲求が見られるようになることはよく知られるところです。積み木を重ねて何かを作っている子どもに『○○ちゃんすごいね！』と声をかける先生のことばは、他の子どもを刺激します。このほめことばが励みになって、自分も先生にほめられたいという気持ちがふくらみ、競争意識のような意欲をともなうことで教育効果を生み出すわけです。当学園の先生方は自閉症の子どもたちにもこうした心理が強く働いていることをよく知っていて、障害のない子と同じようにこうした働きかけをしています。互いの子どもの心を刺激していくと、個が活性化するとともにグループの結びつきが強くなってきます。感情が表れにくい自閉症の子どもたちではあっても、間違いなくこうした意識をもっています。初めのうちは他の子に全く反応しないような子どもでも、内心とてもほめられたいとか先生に対する他の子へのやきもちの感情をもっていたりするものです。お家の中では兄弟関係の中でこうしたことが見られるはずです。自尊感情を含めて、どうぞこのような子どもの心理を汲み取りながら生活の中に活かしてあげてください。

この一年間、多くの子どもたちが教育センターを自分たちの場所として活動する中で、本人なりの自己表現をしてきました。彼らには我々に気づかないこのセンターへの想いがあるはずです。自分の教室で先生やグループの仲間と過ごした記憶が、鮮明な残像をともなって心に残っていることと思います。次年度はまたグループや活動内容が変わるわけですが、新たな環境のもとで子どもたちの活動領域を広げ、内在する心身の能力をさらに引き出していきたいと思います。

コラム　自閉症児の子育てから（２）

岩崎　敦子（保護者、学園アドバイザリーボード）

自閉症でも「私はあなたの娘」と伝えてくれる我が子

母子の心の繋がりが感じられるようになってから、娘は私の姿がちょっとでも見えないと大泣きをするようになりました。母親冥利に尽きる思いでした。

それでも自閉症の娘を理解することはとても困難なことでした。何が出来て何が出来ないのか、どこまで分かっているのか、何をどこまで教えたら良いのか、どんな生活を送れるのか等々。いくら考えても答えは見つからず、教えてくれる人もいませんでした。娘は四歳になっていました。

ちょうどその頃、主人が海外赴任することになり、私は否応無く娘を連れて二日掛かりの長旅を断行しました。20時間以上も飛行機の中で無事に過ごせた様子、その間慣れないトイレで一度も使えなかったのにお漏らしもしなかった娘を見て、この子は事前の私の話や態度から何かを理解して、自分なりに頑張ったのだと確信しました。「やれば出来るじゃない」と感動しました。

また二週間のソ連旅行に行った時は、朝から夜まできっちり決められたスケジュールをこなし、飛行機･バス･夜行列車での移動も問題なく、美術館や宮殿の見学も静かに回れた娘に対して、計画性をもった生活こそ合っていると教えられました。やって良いこと悪いことも親の態度で伝えられると感じました。旅行中、娘が楽しんでいる様子までうかがえて本当に嬉しかったものです。

旅行の後での娘の成長振りにも目を見張るものがありました。

安全でも単調になりがちな日常よりも、変化のある幅広い経験を積極的に積ませることが重要だと知らされました。

こうして、私は娘自身の様子から様々なことを学んできました。娘は言葉では言い表せないけれど、様々な手段で自分のことを私に教えてくれました。

伝えようとしていることを見逃すことなく感じ取れるように、常に正面を向いて取り組む姿勢が大切だと思います。母親だからこそ、同じDNAを持っている血の繋がりで直感的に理解できることが多いと感じます。ですから、私はいつも感度を研ぎ澄ませて待っています。娘が今度は何を私に伝えようとしているのかと。

このコラムは４回シリーズでお届けします。

特別講演会報告

アメリカから言語治療教育の第一人者である、ダイアン・トアクトマン-カレン博士が来校され、念願の講演会が２月１５日に実現しました。博士は、言語と障害児教育の専門家で、特に自閉症やアスペルガー症候群の子どもたちへの治療教育において多くの研究成果をあげてこられました。また、自閉症に関する専門紙の編集長や、多数の専門委員会の顧問を務める傍ら、ボストン東スクールのアドバイザリーボードのメンバーとして創立期からお力添えをいただいております。

今回はアメリカからの最新情報に加え、日本でもこのところ大分知られるようになった、「共同注視（Joint Attention）」や「心の理論（Theory of Mind）」など、自閉症者の社会性や言語発達に関する話題を分かりやすく講義してくださいました。また、経験を通した学習、つまり実際に動いて触れて学んでいくことが何より大切であり、脳科学研究からも指示されていると力説されました。理論的な説明だけでなく、研究結果に基づいた支援方法を具体的に話してもらえてよかったという受講者からのコメントも届き、有意義な会になりました。

（高松）

【ギャラリー紹介】

今号は、冬の作品を紹介します。個性あふれる雪だるまは1・2年生による作品。様々な形の雪の結晶は、折り紙を折り、できあがりの形を考えながらハサミを入れて作った3・4年生の力作です。可愛い顔の雪だるまと家の作品、おひな様は年少・年中児によるもの。いろいろなモチーフで何度も練習を重ねるにつれて、ハサミの使い方も少しずつ上手になりました。右下は、年長児による、もちつきや羽根つきなどのお正月にちなんだ活動をしている人を描いた模写絵画です。手足の曲がり具合などをよく見て、模写することができました。

平成20年度療育プログラムについて

多くのプログラムの定員が充足し、4月から300名を越えるお子さんとともに新年度をスタートします。
まだ若干空きのあるプログラムもございますので、お知り合いで受講を希望される方がおられましたら、ご紹介ください。

武蔵野東教育センター
〒180-0012
武蔵野市緑町２-１-１０
電話　0422-53-8585
FAX　0422-53-8595
Email: education-center@musashino-higashi.org

ホームページもご覧ください
http://www.musashino-higashi.org

セミナーのご案内

平成20年度のセミナーの日程が決まりましたので、ご案内いたします。詳細は後日お知らせします。

平成２０年　６月２８日（土）10時～15時
平成２０年１１月２２日（土）10時～15時
平成２１年　１月１７日（土）10時～15時